

聴いてください、 ろう者の声も!

丸山正樹講演会<手話通訳・要約筆記 付>

2011年に出版され、昨年文庫化された『デフ・ヴォイス 法廷の手話通訳士』の著者である丸山正樹さんをお迎えして講演会を開催します。著者ご本人に作品の面白さやメッセージを語っていただいて、ろう者と聴者の文化の差異や、ろう者の新しい動き「手話言語条例」について考えてみましょう。

日時

2016年7月9日(土)

13:00開場 13:30開演

会場

サテライトキャンパスひろしま
(広島県民文化センター5F)

広島市中区大手町1丁目5-3

前売券 1,000円 当日券 1,200円

プログラム

13:00 開場

13:30 開会 講師紹介

13:40 講演

『デフ・ヴォイス』に込めた思い 丸山正樹

14:30 対談(ろう者、手話通訳士)質問

15:00 閉会

申込

Web上から直接申し込めます!

 <http://www.deaf-voice.info>

 <https://www.facebook.com/deafvoice0709>

ホームページ



Facebook



一般社団法人 広島県ろうあ連盟

広島市南区比治山本町12-2 県社会福祉会館内 ☎082-252-0303



デフ・ヴォイス

法廷の手話通訳士

Deaf Voice

A Sign-Language Interpreter in Court

丸山 正樹 (著)

●あらすじ

仕事と結婚に失敗した中年男・荒井尚人。今の恋人にも半ば心を閉ざしているが、やがて唯一の技能を活かして手話通訳士となる。ろう者の法廷通訳を務めていたら若いボランティア女性が近づいてきた。現在と過去、二つの事件の謎が交錯を始め…。マイノリティーの静かな叫びが胸を打つ。衝撃のラスト!

●読者感想

一気に読みである。デフ=ろう者と、その両親のもとに生まれた健聴の子=コダの葛藤を通奏低音とし、殺人事件を絡ませながらろう者の世界を描き出す。ミステリーとしての面白さもあるのだが、やはりなんといっても、ろう者の世界を書き切った「凄み」に感動させられる。手話はろう者の言語であり、日本語対応の手話はいわば第二言語であること。つまり、ろう者は独自の言語を持ち、独自の文化を形成しているということ。毅然たるその姿が美しい。感動の書である。

<主催>一般社団法人広島県ろうあ連盟、県立広島大学、丸山正樹講演会実行委員会

<後援>社会福祉法人広島県社会福祉協議会、社会福祉法人広島市社会福祉協議会、一般社団法人広島県身体障害者団体連合会、公益社団法人広島市身体障害者福祉団体連合会、公益社団法人広島県社会福祉士会、広島県手話サークル連絡協議会、広島県手話通訳士協会、広島県言語聴覚士会、広島県精神保健福祉士協会、NPO 法人広島自閉症協会、広島の楽しい100人、中国新聞社



●講演テーマ

『デフ・ヴォイス』に込めた思い

丸山 正樹(まるやま まさき)

1961年、東京生まれ。早稲田大学第一文学部演劇科卒業。広告代理店でアルバイトの後、フリーランスのシナリオライターとして、企業・官公庁の広報ビデオから、映画、オリジナルビデオ、テレビドラマ、ドキュメンタリー、舞台などの脚本を手掛ける。2011年、『デフ・ヴォイス』で小説デビュー。第18回松本清張賞最終候補作となる。

小説のタイトル「デフ・ヴォイス」にはいくつかの意味がある。

一つは、そのまま「ろう者の声」。

一般の人(聴者)は、「ろう者はしゃべることができない」と思っているが、実際には「音声日本語」を話すことのできるろう者は多い。ろう学校での日本語発声教育(「聴覚口話法」)のたまものであるが、当然聴者と全く同じとはいかない。中軽度の難聴者や中途失聴者でなければ、好き好んで「声を出したい」と思うろう者はいないのではないか。いわば「聴者から押し付けられた言葉」としての「声」だ。

もう一つは、かなり意識気味ではあるが、「マジョリティの中で埋没してしまうマイノリティの声」。ろう者に限らず、在日外国人、障害者、高齢者、難病患者、性的マイノリティ……社会的弱者とおおざっぱにひとくくりはできない彼らのささやかな要望は、圧倒的な「その他多数」の声にかき消され、世間に届かない。いわば「声なき声」。そんな思いを象徴させた。

最後に、「声」そのものではないが、ろう者にとっての「言語」である「手話」。作中にも記したが、以前は「ろうあ者」と言われていたものを自ら「ろう者」と言い換えるようになったのは、「聾(聴こえない)ではあっても啞(話せない)ではない」、という彼らの矜持だ。彼らには「手話」という「言葉」がある。単なるコミュニケーション手段ではなく、自らを表現する「言語」が。そういう意味を込めての「デフ・ヴォイス」。

今回は、私が小説にこめた上記の思いを主軸として、

- 私がどのようにして「デフ・ヴォイス」という小説を書くにいたったか
 - 小説が刊行されてからの反響、そこで感じたこと、新たに知ったこと、今思っていること
- などを話しながら、講演後、
- 当事者の実際の思い
 - ろう者が置かれている現状(つらいこと、不便なこと、望むこと等)
 - 法整備によって変わったこと、変わること(障害者差別解消法、手話言語条例、手話言語法等の現状)

について、専門家及び当事者の方とお話できればと思います。